若越郷土研究 21/5

幕末の大野・越前両藩の蝦夷地観

―関連的把握を中心に―

三上一夫

一　はじめに

幕末の内憂外患の激動期にあって、大野藩が藩政の改革路線のうえに、ことのほか北辺の蝦夷地開拓に挙藩的な情熱をたぎらせ、口蝦夷（北海道）へ、さらには北蝦夷（樺太〈サハリン〉）へ進出し、まさに「山間の雄藩」の勇名を全国に響かせたことは大いに注目に値する。

一方、越前藩にあっても、藩政改革の推進過程①のなかから中央政局に対して、幕藩体制の自己否定による全国的統一国家の政治構想を強力に訴えたことは、他の諸藩に先がけた異色的な動向として高く評価したいところであるが②、このさい越前藩も大野藩の場合と同様に、蝦夷地対策をしっかり視野に収めている点で、大野・越前両藩の関連的把握という問題意識が生ずることになる。

そこで本稿では、両藩のそれぞれの蝦夷地観について検討を加えたうえ、これらの論策相互の類似的な側面と相違点を中心にいささか論述したい。

註

① 越前藩の藩政改革の財政的側面については、拙稿「幕末における越前藩の富国策について」（日本歴史学会編『日本歴史』二四一号、昭43・6所収）において検討した。

② 越前藩の中央政局への政治的参画については、拙稿「文久期における越前藩の幕政改革運動について」（『日本歴史』二八八号、昭47・5所収）において、また全国的統一国家の論策面については、拙稿「越前藩における統一国家論の展開」（福井県郷土誌懇談会編『若越郷土研究』十八の一、昭48・1所収）において検考した。

二　大野藩論にみる蝦夷地観

嘉永六年（一八五三）ペリー艦隊の浦賀来航に引きつづき、ロシア帝国の提督プゥチャーチンが軍艦四隻を率いて長崎に現われ、樺太の境界線の協定を要求するにおよび、幕府は驚いて北辺の防衛、開拓に真剣に取り組む必要にせまられた。そのため安政二年（一八五五）三月、幕府は東西蝦夷地を松前氏より収公し、同年十月、全国諸藩に対して、開拓希望のものは速かに申し出るよう指令したのである。

これに対して大野藩では、蝦夷地経営の具体的藩論がまとまり、同年十二月、次のような伺い書を幕府に提出した。

今般蝦夷地之義に付、御触書之趣能登守、家来共迄一統拝見仕、有志之者申談候は、兼々主人能登守厚申付有之、乍不及漢学、蘭学、其他西洋兵学、砲術、

築城等之義研究仕候は、唯学ひ候斗には無之、其術を行ひ、皇国之御為①と存込罷在、且能登守領分越前国大野と申処は、北寄山間極寒之地、毎歳積雪五、六尺、或は壱丈に及び候土地に而、一統右之寒土に成長仕、雪中を不厭山川を跋渉し、漁猟等仕、乍恐筋骨頑健之性質、風寒暑湿に馴居候得は、誠に千載之一遇、何卒不苦義に御座候はゝ、彼地へ罷下り、地形に応じ、夫々之所置仕、第一には公辺之御為め、主人家之為にも相成度旨に而、銘々見込之筋を以て能登守へ申立候処、能登守にも尤に存し、許容有之、就ては御触達之御趣意に基き、其御懸り役所へ先私罷出、赤心を吐露仕、差懸り緊要之件々奉伺、其上に而取斗候様被申付、出府仕候に付、左之通奉伺候。

（後略）〔注、引用文中の傍点は筆者による。以下同じ。〕

（『柳陰紀事』）

さらにつづいて、銃砲製造者の移住、鉱山の開発、漁猟、諸物産の取引、運上の免除、開発資金の融通などの具体的な条件を提示している。

言うまでもなく大野藩領は、越前国のなかでも最も寒暑の差が激しく、また降雪量の甚だしい風土上の特質がみられるが、同藩では天保十三年（一八四二）より抜本的な藩政改革に着手、まず従来の累積した藩債の整理に乗り出し、さらに積極的な富国強兵策を進めたのである。このさい藩主土井利忠を中心に内山良休・隆佐兄弟らの改革派が主導的な役割を果した。つまり嘉永二年（一八四九）洋式銃砲の製造に着手、同六年洋式陣法による軍制改革を布告、一方藩校明倫館を中心に人材養成をはかり、安政三年蘭学館（洋学館）を創設して洋学の振興に力こぶを入れた。さらに全国的にみても異色ある富国策として、安政二年大坂北久太郎町に藩店大野屋を開設②し、領内外の諸物産を有利に売却するという藩権力による重商主義的政策を強力に進めるわけである。

前述の伺い書の冒頭で強調したところは、まさしく以上のような藩政改革による富国強兵策の路線に沿ったものである。従って一藩的な「絶対主義への傾斜」③による〝雄藩〟としての展開過程のなかで、「外圧」により触発されるナショナルな課題に真剣にめざめ、とくに藩領内の風土や気象とかなり類似した北辺の蝦夷地の開発・防衛の重要性に着目し、「公辺之御為め、主人家之為にも相成度旨」と、懸命に画策したのである。

そこで翌三年三月、内山良休を蝦夷地用懸り、内山隆佐を総督に任命し、まず口蝦夷の実地探査④に乗り出すのであるが、このさい藩の蝦夷地経略の見方、考え方については、隆佐が調査結果をまとめて箱館奉行堀織部正に差し出した建白書のなかで、容易に検出することができる。

そのなかで、まず北辺の緊急かつ重要性を強調したのち、すでに開港した長崎・下田・箱館の三港につき、「長崎は近境に大諸侯も多く、且九州陸続きにて殊に薩州侯、肥前侯を始め他諸侯も、追々砲術其外とも研究も行届、士気も振候よし、応援の都合も宜かるへく、下田は江府より里数近く、陸路線に而、万一異人狼藉に及候と

も、椅角援助の対策も可有御坐候得共、乍恐当港(注、箱館)は、渺たる孤島も同様、陸路続と申せは亀田村より市中へ入口幅十町有余の坦有の斗、万一右陸路を断切り候節は、実に応援の致方無之哉に奉存、乍恐実に寒心の至に奉愚察候。」と述べ、箱館港が長崎・下田両港に比べて立地的に極めて大きな問題をはらんでおり、「渺たる孤島」も同然で、全く寒心に堪えないとしている。さらに「従来商人どもが現地で利権を専らにしているが、もし全島が異国のために掠取されることになると、〃唇亡びて歯寒し〃というように内地(注、本土)もたちまち衰えてしまう」と、いたく危惧するのである。

この点、〃皇国〃にとり口蝦夷の戦略的重要性にもかかわらず、異国の侵略に対する防衛面で甚だ憂慮すべき実情にあるとし、とくに箱館の持つ積極的意義を真剣に訴えたわけである。

ところで蝦夷地での探検の結果確認されたのは、現地で「場所」(注、漁場)の権利を大商人が握っていて、新たな移住者が容易に入り込めなく、強いて有利に進出できる地域としては、北蝦夷(奥蝦夷)と呼ばれる樺太(サハリン)であった。そこで大野藩では、安政四年より樺太への探検に乗り出し、北緯五十度線を越えてホロコタン(幌子谷)⑤まで現地調査を行ない、さらに虎視眈々と南下を策するロシア人の動向をも詳さに調べたうえ、正式な開拓願を箱館奉行に提出した。その結果翌五年三月幕府から、北蝦夷地の西海岸、ライチシカより北ホロコタンまでの開拓漁業の許可が下りたのである。

そこで藩では早川弥五左衛門を屯田司令とし、藩士十名、領民数十名を樺太に渡航させたが、翌六年五月、箱館にとどまり樺太のウショロ(鵜城)にいる開拓団との連絡に当たっていた隆佐は、開拓資金の助成を箱館奉行に要請した。その申請書につけた「贅言」という一書があるが、そのなかで同藩の偽らない北蝦夷観がひれきされているので、次に引用したい。

序ながら申し上げ奉り候。そもそも奥地開拓の見込を立候節、私愚存には、日本地失うべきも、夷地は失うべからず。奥地尤も失うべからずと申す議論を発し候、人皆不服、頻りに嘲笑を請け候へども、今日猶その説を主張仕り動き申さず候。その訳は、日本地は膏腹豊饒なり。殊に万歳の後、万一外夷のため掠取せらるるとも、素より利ある土地、殊に祖先墳墓の地、豪傑の士義を唱へ候時は、一呼して万人進み、興復の期必定に御座あるべく、夷地奥地は、今日望に任せ、勝手に御割渡し下さるべくとの事に御座候ても勧めかね候。人気万々一外国に割取せられ夫々堡塁等相構へ候時は、今日既に見て鶏肋とする土地に、豈に砲丸を侵して進取するものあらんや。就ては今日片時も早く、人種を移住せしめ度、その内尤も奥地は大切にて一歩進めば一歩の勢を生じ、一歩退けば一歩の畏縮を生じ、人心の振うと不振とは、その間髪を入れずと申す場合にて、殊にこの蝦夷奥地は、皇邦より見れば、歯の唇ある如く、人体の衣裳を着るが如く、無用に似てそ

の実有用なること申すまでもこれなく、（後略）

このように「日本地失うべきも、夷地は失うべからず」との透徹した卓見の理論的根拠を明らかにしている。⑥さらに「当節、皇国末曽有の一大御変革の御時節、何卒寸毛なりとも、国家万世の御為筋に相成度と存込候」との真剣な危機意識に徹し、このさい「奥地開拓は即ち皇国を保存するの一大枢要なること」との他の諸藩には見られない的確な情勢判断のもとで、とかく北辺対策に日和見的な幕府の決起を促したのである。

たしかに、当時のロシア帝国の極東政策をみた場合、その前年の一八五八年（安政五）、シベリア総督ムラヴィヨフが清国に迫って愛琿条約を結び、黒龍江を国境として南下策を強引に進めており、さらに樺太対岸の沿海州をうかがい、経略の手を伸ばす形勢となる。

事実二年後の一八六〇年（万延元）の北京条約により、沿海州は完全にロシア領となるわけで、この点北辺の現地探査・開拓の第一線に敢然と立った大野藩として、「外圧」のなかでもとくにロシア人の動向には、極めて敏感に受けとめることができたものと言えよう。

註

① ペリー艦隊の来航による嘉永六年七月一日の老中阿部正弘からの諮問に対する同年八月六日付けの松平慶永の答申書のなかでは、強硬な拒絶論を訴えたが、そのさい「皇国を守らんか為に、各国海岸の備を厳にし、外寇の辺海を侵すを防ぎ、江府の戦闘防禦の儀は、……」と述べている。越前藩としても、藩のワクを越えた日本全土つまり「皇国」の防衛を真剣に考えたわけである。この点大野藩における強兵策が「皇国の御為」としての明確な意識に根ざしているのと、全く軌を一にしていることに注目したい。

② 坂田玉子氏には、『「大野屋」の経営法解明と良休の手腕について㈠』（福井県郷土誌懇談会編『若越郷土研究』二一の二、昭五一・三所収）において、従来不分明な藩店「大野屋」の実態について、鋭い検証のメスを入れた。とくに越田家所蔵の「上申書」の史料により、安政二年大坂に創設した「大野屋」とは、実は大野藩産物会所の出先機関としての「お棚（タナ）」（責任者、島田菅右エ門）で、安政四年大野の産物会所を「大坂屋」と改称し、内山良休が七太郎と名乗って「戸主」として経営に当たり、手代・丁稚に至るまですべて大坂屋七太郎が雇い入れたことが判明する点で極めて注目に値する。

③ 奈良本辰也「雄藩の台頭」（『明治維新論』昭四三、徳間書店刊、所収）において、統一国家への推転の起動力となる「雄藩」の特質について鮮かに解明するが、大野藩も越前藩と同様に「雄藩」としての動向を辿るものと考えたい。

④ 安政三年五月よりの口蝦夷探査については『内山隆佐日誌』（福井大学付属図書館高島文庫蔵）が詳述する。

⑤ 安政四年よりの北蝦夷（樺太）の開拓・経略については、『北蝦夷開拓始末・附大野丸米船救助記』（函館市立図書館蔵）が、その全ぼうを伝えるが、とくに「外圧」に対する立地的重要性を訴える観点が大きくクローズ・アップされていて興味ぶかい。

⑥ 江戸時代後期の経世思想家本多利明の論策

が、越前藩の橋本左内による絶対主義的統一国家の構想の先駆的意義を持つことは、拙稿「幕末における重商主義的論策について――福井藩を中心に――」（『若越郷土研究』一三の五、昭四三・一一所収）で指摘したが、本多の蝦夷地観として、その著『経世秘策』（第四属島の部）のなかで、「日本ニトリテ此地（注、樺太）程大切ナル国界ハナシ、然ルニ拾年バカリ以前ヨリ、モスコヒヤ（注、ロシア）ノ吏来テ滞留セリ、近年ハ運上屋モヨリニ徘徊スルハ可恠行為ナリ」との着目すべき所説がみられる。ところがこの本多の考え方が内山隆佐に大きな影響を与えたことが、内山が『経世秘策』を読んで深い感銘をおぼえて歌った詩「読本多氏豊饒策」に、〃初読豊饒策四篇、距今六十六年前、当時豈計英雄眼、憂世洞観早著鞭、世議紛々若聚蚊、一非一是是不堪聞、即今心事与誰語、臭味相同独是君〃とみられる点からも明白である。

三　大野藩の箱館経営の意義

大野藩では安政三年五月内山隆佐ら一行が蝦夷地の踏査に乗り出すとともに、八月には藩店「大野屋」を箱館の弁天町に開設した。これは内山良休の肝入りで、藩政改革における富国策の一環として具体化されたものであり、領内諸物産を商品化し領外に有利に売りさばくための販売組織網を全国各地に張りめぐらすわけで、箱館の藩店は、安政二年の大坂での創設につづくものであった。とくにこの大野屋の果す役割は、一方において藩の両蝦夷地経略のための先進基地的な使命をも担ったものとみられる。

この藩店の位置については、函館市立図書館所蔵の「北海道開拓使函館支庁租税掛調査図」（明治十年ごろ）で、弁天町一丁目に「大野六兵衛」（一三一坪四分）所有の敷地が明記されており、その図面を基本にして、大正二年、昭和六年、同四十年の地図を照合すると、現在は弁天町一四―一五所在の日本石油ガソリンスタンドの店舗地にほぼ推定されるわけである。つまり函館駅より十字街を経て函館ドック行の市電の大町電停より、前方一番目の交差点の左角地に当たるが、その向い側の目と鼻の地点に、開港後の仮運上所（注、当地の有力な場所請負人山田寿兵衛宅で、安政元年四月ペリー艦隊が入港したさい。ペリーと松前藩の重役が会談している。[1] 現在は函館信用金庫が建っており、「ペリー会見所」の掲示柱がある。）があり、また当時の船着場に近いという立地条件[2]からみて、安政六年（一八五九）六月神奈川・長崎・箱館三港の貿易が開始されると、大野屋としては、極めて有利な態勢で貿易活動を進めることができたと言えよう。

要するに藩では領内の諸物産を藩札で購入し、これを藩船大野丸[3]はじめ蝦夷地通いの船舶で箱館に運び現銀で販売する。ついでその現銀で、北海道・樺太の開拓経略にかかる藩勢力を背景に、同方面の海産物等を有利に買い付け、これらを全国各地に設けた大野屋の組織網を通じて現銀販売を行ない、その収益をどしどし藩庫に納めたのである。このような物産販売の仕法は、明らかに藩権力に基づく重商主義的な利潤を

〔表〕　安政六年、露・米・英・蘭・仏船の出入状況調（於箱館港）

〔『内山隆佐日誌』より作製〕

国名	月　日	事　項
ロシア	4・4	○ 浅山同道上船魯人カビチン船江来る。
	4・20	○ 同刻（注、未ノ刻）過、魯国蒸気船出港。
	5・15	○ 朝魯国蒸気船出帆午後入津。
	5・23	○ 日暮魯国蒸気船壱艘渡来。
	5・24	○ 魯船弐艘ニ而大砲数発。 ○ 今日魯人夥敷上陸店ニ而も相応買物いたし候由。
	5・25	○ 今朝魯三桅蒸気船 兼而滞帆之船 出帆。○申刻魯国三桅船入津。 但今朝出帆之船ニ非、潟口より大砲数十発放ツヽ入津ニ来る。 一昨日着津之二桅船ニ而六発之祝放有之。○今日も魯人店ニ而相応ノ買物有之由。
	5・26	○ 巳之上牌昨夕入津ノ魯船出帆。祝放昨入津の時ニ同じ。
	5・27	○ 魯国蒸気船入津巳之刻ニ右船夕七ツ時過 出帆引続キ２３日入津ノ蒸気も亦出帆。
	6・3	○ 魯国蒸気船弐艘入津。
	6・12	○ 魯国蒸気船壱艘入津。
	6・14	○ 魯国蒸気船ニ而大砲放発数十発。
	6・19	○ 仝夕方魯国大軍艦蒸気船入津。
	7・4	○ 魯国白車輪之蒸気入津。
	7・5	○ 魯国諸船ニ於て祝放有之。
	7・7	○ 魯国蒸気船３艘出帆。
	7・8	○ 仝日魯国大蒸気船出帆。
	7・12	○ 魯国白車輪蒸気出帆伊藤退蔵乗組。 ○ 同国大蒸気船入津直ニ出帆。
	7・15	○ 魯国蒸気も出帆。
	8・12	○ 魯国白車輪蒸気船コンシール乗組入津。
	8・14	○ 昼過魯国大蒸気船入津。
	8・16	○ 今朝魯国白車輪蒸気船出帆。
	8・17	○ 魯国蒸気船一昨夕壱艘昨夕一艘今日１艘〆４艘碇泊。
	8・18	○ 魯国蒸気追々入津今日〆八艘碇泊。

国名	月　日	事　項
アメリカ	6・3	○ 亜国3本柱商船2艘入津。
	6・16	○ 夕方3桅船1艘入津。亜国軍艦なり。　是は鯨猟船之由。
	7・2	○ 亜国2桅商船1艘入津。
	7・21	○ 沖ノ口ニ而亜国碇鎖を見る。
	7・23	○ 亜国モーレン船出帆。
	8・26	○ 朝亜国商船入津。
イギリス	6・16	○ 3桅船1艘着津大砲3発。魯船ニ而も同様請之砲発有之。但英国船なり。
	6・21	○ 昨日湾中より英亜之3桅船出帆、二桅之商船1艘入津を見る。
	7・11	○ 仝日軍艦1艘入津英国之赤旗章を立ち、（後略）
	7・15	○ 英船出帆。
	9・12	○ 英国コンシュル上陸称名寺江止宿之由。
オランダ	4・16	○ 和蘭蒸気船入津。
	4・21	○ 和蘭蒸気船出帆。
フランス	4・20	○ 巳ノ刻比仏国船入津。

〔注〕隆佐は安政6年3月29日箱館着、同年9月19日箱館出帆、同月29日帰藩す。

（なお、本史料の借覧に便宜をはかっていただいた、福井大学教育学部事務長の瓜生守邦氏、同付属図書館参考係長の平泉宏祥氏に深謝する。）

増大させ、藩財政を見違えるほど立ち直らせることになる。この点越前藩が藩政改革のなかで領内物産を振興し、生糸をはじめとする諸物産を、領外交易や長崎貿易のルートに乗せて、領外から大量の金銀正貨を獲得し、藩財政が大いに好転④したのと甚だ類似した仕法とみなすことができる。

そこで大野藩の場合特筆すべきところは、蝦夷地開拓と北辺防衛の第一線に立ちながら、諸物産の交易および貿易活動を強力に展開したことで、その点箱館の藩店は、本来の交易活動のほかに、蝦夷地経略面の諸情報収集のための諜報機関ともなっていたとみてよい。また明治元年の箱館戦争⑤では、出征した大野藩兵の兵站基地的な重要役割を果したことも大いに注目されるわけである。

ところで蝦夷地経略を現地で指導した内山隆佐が、とくに対外関係に対して深い関心を示したことは、例えば箱館における外国船の出入状況についてまで、彼の日誌のなかで克明に記録している点からも明白である。彼が箱館滞留の安政六年三月二十九

日より九月十九日までの期間につき、〔表〕のとおり、ヨーロッパ列強のうちロシア船の出入が最も目立ち計二三件を数え、ついでアメリカ船が六件、イギリス船五件、オランダ船二件、フランス船一件の順となっている。これは箱館貿易の相手国の動向を端的に反映するもので、隆佐もことのほかロシア人の動静に注目しており、貿易開始に先立つ五月二四・二五の両日には、「魯人夥敷上陸店ニ而も相応買物いたし候由」と記録し、多数のロシア人の買物客で盛況を呼ぶ大野屋の実情を伝えるほどである。

当時のロシアの極東進出については、前述のとおり、翌万延元年には、樺太対岸の沿海州を清国から奪取し、いよいよ蝦夷地への経略を画策するすう勢となることを考えると、ロシア船のひん繁な箱館港出入には、単なる貿易上の問題として決して楽観視するわけにはいかなかったのである。

事実安政六年六月、箱館奉行の竹内・堀ら四名が連署で、「（前略）蝦夷地接壌の満洲地方は、魯西亜蚕食、既にアンムル川（注、黒龍江）辺に移住、ニコライスキと申処に交易場も取開候趣に付、交易を名とし、御預船又は外国船へ支配向乗組せ、アンムル川よりカムサッカ辺迄差遣し、彼実情を探ると共に、前文の廉々取調度当夏御試の為め出船為致度候（後略）⑥」との意見書を幕府に提出する有様であった。このように北辺の第一線を所管する幕府側の箱館奉行にしても、未知のベールに閉ざされた対岸の満洲北方でのロシアの動向には、ひたむきな探索の欲求にかられたに相違ない。

このさい大野藩としては、箱館を前進基地としての現地での生々しい体験や実践を通して、両蝦夷地の実態をはじめ、ロシアを筆頭とするヨーロッパ列強の極東進出を肌で感じとることができたわけである。

註

① ペリーと松前藩重役との会見、交渉の事情については、函館市立図書館所蔵の「嘉永七甲寅年亜美理駕船函館港江渡来に付四月十五日より同月二二日までの応接書」が詳細に伝えている。

② 大野屋の位置につき、函館市立図書館所蔵の地図での調査に当たり、同館の奉仕課長布田正氏の労を患わしたことに対して、改めて謝意を表したい。

③ 天野俊也『越前大野藩の「大野丸」をめぐる史料』（『福井県立大野高等学校研究紀要』一〇号、昭45・3所収）において、大野丸の竣工および活躍についての関係史料を掲載し、校訂、解説を加えている。

④ 前掲の拙稿「幕末における越前藩の富国策について」で、長崎貿易ルートによる領内物産の販売仕法の成果についても論及した。

⑤ 『函館市誌』（函館日日新聞社編、昭10）の記載（一二二ページ）のとおり、明治二年五月十一日の戦闘で、弁天砲台に拠った反政府軍の脱走兵が五稜郭に退却するさいに放火して、弁天町一帯をすっかり焼き払っているので、その時「大野屋」も被災したものとみてよい。

⑥ 『函館区史』（函館区役所編、明治44・7、三秀舎刊、所収）二七二ページ。

四　越前藩論にみる蝦夷地観

越前藩では「外圧」に極めて敏感に反応し、安政期藩政改革の推進過程から幕府の

外交策の転換や政治改革を求める論策のなかで、蝦夷地問題が大きくクローズ・アップされる。つまり安政四年幕府が通商条約の是否につき諸大名の意見を求めたさい、同年十一月二十六日春嶽が差出した意見書で、積極的開国策をひれきするが、対外関係については、「其中最も怖るべきは、他の諸国輻輳に在らすして、魯・英二国の並至ニ候。両雄並び立たざる情実既ニ使節舌頭ニ歴然と相現申候。他日両国の内より必定大御危難の事件希望申すべきと杞憂に堪えず候。」①と、日本にとりロシアとイギリス両国が最も警戒すべき相手国であり、しかも必ずやそのいずれかによって我が国が大きな災難に見舞われると、いたく憂慮している。そして幕府政治につき、「今迄の旧套にては相済し難く候」と、数々の抜本的な政治改革を指摘するが、そのなかで、「内地ハ勿論、蝦夷地迄山海共種々御措置これあるべき事」と、蝦夷地対策の重要性を強調している。

さらに幕府の再度の諮問に対して、春嶽は同年十二月二十七日答申書を提出、前述の意見書に基づき一段と明快に進取的な開国貿易論を展開するが、とくに蝦夷地対策についての種々の具体的仕法が注目される。②つまり外国貿易を「富国の基」と考えるよりも、先づ第一に「蝦夷地を開墾いたし、吾府庫となすべき事」が肝心だと、蝦夷地開発が最優先さるべきものとしている。そして「蝦夷地も大諸侯数名遣され、山礦を開き、漁猟を始め、巨林を伐り、軍艦を製造し、礮台を築立、守衛を厳しくすべき事、方今急務の一と存じ奉り候」と、その具体策を述べている。

ところで、わが北辺に最も係わりの深いロシアについては、「世界第一等の強国」と評価し、「且吾と唇歯の勢を為居候得は、報い難きの恩恵を以其歓心を結び置き候事、此又当節の一要務と存じ奉り候事」と、友好的態度で臨んでおり、いわば日露同盟的な外交路線を示唆する見解を表明している。

実は、この答申書の作製に当たり、春嶽の謀臣橋本左内の論策が大いに導入されていることが、一カ月ほど以前の十一月二十八日左内が盟友村田氏寿あてに差出した書翰の内容から明らかであるので、次に彼の蝦夷地観について触れることにする。

註

① 「建言拾遺」（『松平春嶽全集』㈠所収）二四一ページ。

② 「建言拾遺」（〃　〃）二四七―八ページ。

なお蝦夷地開発には、「日本人斗リ被用候ハ、、徒ニ失費多、且急ニ開兼可申ニ付、魯人墨人御傭被成、其所長為御尽可然奉存候。」と、ロシア・アメリカ両人を雇用して、その長所を利用すべきだとする積極策までみられる。

五　左内・小楠の蝦夷地対策

左内は、イギリス・ロシアと蝦夷地や我が国との関係につき、大要次のような情勢分析を行なっている。①

イギリス・ロシアは両雄並び立たないところであり、そのためイギリスからロシアを伐つ先手を我が国に頼むか、また

は蝦夷・箱館を借り受けたいと要求するだろう。そのさいはイギリスを断然断わるか、またはこれに従うか、いずれかの定まった方策がなければならない。ところで私は是非ロシアに従いたい。その訳はロシアには「信」があり、隣境であり、かつ我が国とは唇歯の国である。我が国がロシアに従えば、ロシアは我を徳とするだろうが、イギリスは怒って我が国を伐つであろう。これは我が国のかえって願うところで、ひとり孤立して西洋諸国の同盟に敵対は難かしいが、ロシアの後援があれば、たとえ敗れても全滅に至るようなことはない。そうなれば、この一戦で我が弱が強に転じ、危を安に変ずることになって、我が日本も真の強国になるであろう。

確かに左内は、イギリス・ロシア両国が極東の利権をめぐり抗争することになるとの情勢判断に立ち、我が国の場合とくに蝦夷・箱館がかれらの経略の手に毒されるのを真剣に危惧するのである。このさい、イギリスに比べて「我トハ唇歯の国」であるロシアを高く評価し、その友好・同盟関係により、イギリスなどヨーロッパ列強の進出に対して北辺の防衛を堅持し、当時の緊迫したアジアの国際関係を有利に導こうとする企図は明らかである。

そのためには、「只管和親平穏」を望む幕府の日和見主義を彼は厳しく批判して、思い切った幕政改革を訴えるが、とくに蝦夷地経営は、伊達遠州（注、宇和島藩主伊達宗城）や土州侯（注、土佐藩主山内豊信）を派遣し、さらに「内地の乞児・雲介の類ニ頭を立、相応の賄遣し、蝦夷へ遣し、山海の営致され、往来ハ重ニ海路より致し候ハは、蝦夷も忽開墾相成るべく、航海術も直ニ熟すべくと存じ奉り候。」と、労働力として本土の乞食・雲介の類まで投入するという大がかりな積極策を主張している。そして蝦夷地との交通を専ら海路によることにより、航海術も大いに進歩するものと判断するのである。

ところで左内のロシア観として、その侵略的なツァーリズムの実態を把捉しない向きがあるが、ロシアとの和親または同盟関係のもとで、イギリスなど列強に対抗しようとする外交的術策としては、一応の評価がなされて然るべきであろう。②

一方安政五年四月越前藩に招へいされた肥後藩士横井小楠は、その後同藩の藩政改革に主導的な働きをすることになるが、彼の蝦夷地に対する情勢判断としても、イギリス・ロシア両国の進出との関連を最も重視している。つまり彼の『国是三論』（万延元年）のなかで、ロシアがクリミア戦争で西方での南下政策にざ折した事情に触れたのち、「魯国の日本に通じて慇懃を致し又蝦夷の経営を論ず、其根拠知るべき也。黒龍江は我北蝦夷の薩哈連（注、サハリン）に隣れば、其馬頭繁盛に到らば諸州の船舶日本海に輻輳して、英・魯の戦争も亦数年ならずして日本海面に起らんとするの勢あり。此時に当って日本咽喉の地に在て其嚮背大に二国の強弱に関係すれば、二国必日本を争ふべければ日本の危険尤甚しといふべし」③と、イギリス・ロシア両国間で

極東経営の覇権をめぐる抗争が必至であり、しかも我が国とくに蝦夷地がその渦中に置かれるものと判断する。

さらに小楠は、「海外の形勢を説き併せて国防を論ず」（注、起草年月日は不詳）の論策でも、英・露の衝突をめぐるクリミア戦争のてん末を述べ、「英又早く其機を知り屢々日本及蝦夷地に来て条約を求るは、魯の情態を深く恐るる所あればなり。所謂日本幷蝦夷地は魯・英の争地と。嗚呼眼孔を開き大寐を醒すべきことならずや」④と、厳しく戒めている。

要するに蝦夷地対策については、前述のとおり左内が日露同盟的な視座から画策したのに対し、小楠の場合は、イギリス・ロシア両国に対して同様な警戒的態度を以て臨み、それだけに蝦夷地の危機的な情勢を真剣に受けとめるのである。左内・小楠とも越前藩論を主導する代表的人物であるだけに、両者の論策にはとくに注目したいところである。

註

① 安政四年十一月二十八日、村田氏寿あて左内書翰（『橋本景岳全集』（上）所収）

② 拙稿「橋本左内の外交観について――日露同盟論を中心に――」（社会文化史学会編『社会文化史学』三号昭42）において、左内の外交政策で主軸的意義を持つ日露同盟論について検考したが、要するに彼はツァーリズムの実態に対する正しい評価を欠いでおり、また英・露間の軍事力の相違など十分認識しない向きがあるとしても、極東への経略をめざすヨーロッパ諸国を逆手に利用して、同盟または和親関係により日本の対外的危機の克服をねらったのは、外交政策として巧妙な策謀とみなすべきであろう。

③ 横井小楠「強兵論」（『国是三論』万延元年）（山崎正董編『横井小楠遺稿』所収、四四ページ）

④ 事実、この小楠の危惧するところが、文久元年（一八六一）に「ロシア軍艦対馬占領事件」となって表面化する。つまり同年二月ロシア軍艦ポサドニック号が対馬の芋崎浦に停泊し、付近一帯の永久租借権を要求したが、同年七月イギリス公使オールコックが二隻の軍艦を派遣して、ロシア軍艦を退去させたのである。これは明らかに、日本海と東シナ海を結ぶ対馬の軍事的地位が高まったことを示すものである。

六　両藩の経略視角の異同

大野藩が蝦夷地探査の過程で作製した「伺書案」のなかで、「夷地全島ハ北門ノ鎖鑰枢要ノ地ト承リ兼々苦心モ仕古来識者ノ建策議論モ見聞仕候ヘ共何レモ実践ノ上ニテ策ヲ建候ハ甚稀ニテ多クハ伝聞ニ拠候事ト勘考候。今般乍聊実地見聞仕彼此熟攷仕候ニ実ニ大切ノ要地ニテ四方環海応援ナク人員不定無人ノ地同様、皇国ノ御為存込候テハ杞憂ニハ候ヘ共、寝食ヲ不安事ニ存シ候。乍去実践ニ無之候半テハ妙策御座候共、画餅ニ属シ益ナキ事ニ相成リ候（後略）」と述べている。①

つまり蝦夷地全島が北辺の「枢要ノ地」であり、古来識者の建策や論議も出ているが、いずれも「実践」の上での策を建てているものは極めて稀で、多くは「伝聞」の域を脱しなく、いくら「妙策」であっても

「実践」によらなければ「画餅」に類し無益なものだというのである。まさにこのことは、蝦夷地での懸命な実地探査から導き出された貴重な論理であったと言えよう。

このさい「外圧」に対する外交策についても、越前藩論の場合、橋本左内が主導する日露同盟論では、確かに対英防衛面からみて現実的でかつ権謀術数的な策略と考えられるが、一方においてロシアの極東進出の動向についての的確な情勢判断を欠いだことは否定できないところである。その点大野藩が北辺の現地探査や箱館におけるロシア貿易の「実践」のうえからは、外交路線で、虎視眈眈とわが北辺をうかがうロシアに対する提携策には容易に踏み切れないどころか、むしろ厳しい警戒的態度をとらざるを得なかったものと考えたい。②

ところで、越前藩が北辺開拓の緊急性を十分認識していたことは前述したところであるが、同藩でもその具体化を真剣に画策したのが、安政五年七月幕府への願書の案文を作製したことから如実にうかがわれる。

その案文では、「万一外夷上陸抔仕、些少狼藉の挙動これあり候はは、忽鳥散魚潰、億万の生霊流離転輾、誠に憐むべきの義と存じ奉り候」と、蝦夷地の危機的情勢を訴えながらも、「北地は荒漠の義」で一藩の力では蝦夷地全島は到底無理である。そこで差し当り約五〇里四方を借り受けたいが、風土気候が不慣れなため深入りは避けたいところで、まず石狩川辺を中心とし、北境は海を限る範囲内にして欲しい。そのうちに風土に慣れてくれば、かねて問題の「薩哈連島」（注、樺太のこと）へ進出して、沿岸防衛と開拓に励みたいと言うのである。③

この願書の内容は、安政二年十二月の大野藩の蝦夷地開拓の伺い書とかなり共通してはいるが、大野藩ほどの確信と迫力に満ちたものとは見なし難い。

確かに大野藩の方が、越前藩に比べて厳しい風土的条件にあるため、北辺の環境により一層堪え得る適応性に恵まれているが、さらにまた箱館港を前進基地として蝦夷地交易を有利に推進するためにも、精一杯広範囲の北辺を視野に収めた積極的探査、経略がぜひ必要であったわけである。このことが、大野藩の伺い書をして、蝦夷地の風土に臆せず、不とう不屈の開拓魂に徹せしめたものと思考される。

ところで、前述の越前藩の願書の方は、ついに幕府へは未提出に終ったのである。当時の国内情勢として、いわゆる「将軍継嗣問題」をめぐり、井伊政権と雄藩大名とが鋭く対立したなかで、六月日米通商条約が調印され、翌七月幕閣専制に反対した春嶽が隠居謹慎を命ぜられたことにより、越前藩の中央政局への政治的発言権が一たん封ぜられることとなる。そのためかねての同藩の蝦夷地開拓の構想は全く行き悩まざるを得なくなった。従って北辺開拓の願書も、単に案文の段階にとどまったものとみられる。

しかしその後井伊政権の失脚により、越前藩の政治的立場が蘇生する段階で、同藩の北辺への真剣な画策が開始され、文久元年（一八六一）二月、同藩は青山小三郎を製産方御用として箱館に派遣し、さらに遠

く樺太地方を探索させた。彼は藩船大野丸に乗って敦賀を発し四月樺太のウショロに着し、同方面を調査して蝦夷地を経て七月帰藩している。越前藩としては、この段階ではじめて自藩の手で蝦夷地の生々しい実情を調べたことになるが、すでに大野藩がその五年前にさかのぼり卒先して北辺開拓の先頭に立って組織的な探査に乗り出したのに比べると、はるかに立ち遅れていると言わざるを得ない。

註

① 前掲『北蝦夷開拓始末』

② 安政二乙卯年自六月至八月仏船碇泊日記』（函館市立図書館蔵）により、箱館における当時のロシアの動向を知ることができる。この日記は安政二年六月七日箱館港弁天崎沖にフランスの軍艦モビル号が碇泊したさい、箱館奉行が六月より八月にかけて詳細な日記をしるしている。そのなかで仏船側の諸情報を収録するが、ロシア人の動静についても伝えている。例えば六月二一日の条では、ロシアの極東進出の事情に触れ、「一躰魯人掠奪の志深く畢竟夫より戦争も発り候義にて、サカリンえ一旦陣営取立候義は、同所より蝦夷、夫より日本と志し候事に可有之候由に申聞候事」と述べており、蝦夷地から日本本土を侵略しようとするロシア側の企図をフランスの立場から指摘したものと言える。こうした危機意識は、単に箱館奉行ばかりでなく、現地に進出したものには、ひとしく感得されたものとみてよい。なおロシアは、イギリス・フランスなどヨーロッパ先進国の場合――これらは自国の産業資本の市場をアジアの後進地域の内部に開拓するための強力な進出策を試みたが――とは全く事情を異にし、伝統的なツァーリズム（皇帝専制主義）のもとで、極東の利権に直接結びついた宮廷勢力の推進によって活発化したもので、しかもツァーリズム内部の大きな矛盾――左内はもちろん小楠のロシア観でも、ツァーリズムの実態を的確に把握したとは言えないが――に対する農民・市民の不満の解消を対外的な発展膨張策に求めんとして、アジア諸地域に強硬な侵略を進めたわけである。この点、越前藩に限らず、北辺開拓、防衛に直接タッチしない諸藩では、こうしたロシアの企図に対する摘切な情勢判断を欠ぐ向きが大きかったものとみなければならない。

③ 左内の手書「安政五年七月越前藩幕府に呈したる願書案」（『橋本景岳全集』下巻、所収）

七　おわりに

大野・越前両藩の蝦夷地経略に対するそれぞれの論策に視点をすえ、さらに両論の特質や関連的側面①について考察した。確かに当時の厳しい「外圧」に対応する先覚的な論策は、高く評価されるところであるが、大野藩の他藩に先がけた蝦夷地経略や箱館での交易、外国貿易の実態をみた場合、主として論策に終始した越前藩とははるかに現実的であり、また「実践的」であるとみることができる。この点こそ、両論を比較検考するさいの最も重要な研究視角と考えたいが、要するに両藩とも、ロシア・イギリスなどヨーロッパ列強の極東進出②への危機意識に徹し、藩領のワクを越えたナショナルなレベルで、北辺の蝦夷地対策に懸命に取り組んだことの歴史的意義は極

めて大きいものと思考される。

註

① 越前藩としても、大野藩の蝦夷地経略には極めて深い関心を持っており、その点の情報も丹念に入手している。例えば大野藩側の北蝦夷探査の詳しい報告書（『文久元酉年七月十八日、土井能登守家来勝手へ差出し候書付。対馬守』）〔註、この文書は、大野藩主の家臣から宗対馬守の手を経て幕府に提出されたとみてよい。〕の内容が、そのまま越前藩の春嶽の情報収集網によって承知されたことに注目したい。（「松平春嶽公史料」〔小池藤五郎編『幕末覚書』所収〕

② 左内が主導する越前藩論の対外政策として、イギリスを敵対視し、ロシアとの提携策を企図するが、大野藩ではロシアに対する警戒的態度とともに、イギリスにも厳しい批判的態度をとらざるを得なかったとみてよい。例えば前掲『内山隆佐日誌』の安政三年五月十日の条で、箱館町人三津屋六右衛門よりの書翰のなかから抄出し、「前略扨五月二日イギリス人市中江上陸いたし存外之狼藉店ニ土足ニ而酒呑喰物いたし其外諸道具売物手当り次第打こわし婦みちらし薬種店の亭主面を手負いたし殊之外論ニ而一統表戸〆壱人も往来難相成扨々大困り入申候。（後略）」と記録しているが、こうした現実のイギリス人のろうぜき振りには、大野藩として従来からの認識を改めざるを得なかったであろう。